

令和 4 年 6 月 30 日現在

機関番号：32639

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02496

研究課題名（和文）「協同的な学び」による幼児教育・保育実践の質に関する研究

研究課題名（英文）Study on quality of the early childhood education and care in the cooperation learning

研究代表者

大豆生田 啓友 (OMAMEUDA, Hirotomo)

玉川大学・教育学部・教授

研究者番号：20259170

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、幼児期における子ども主体の協同的な学びの保育が保育の質向上といかに関連性を持ち、また、そのような志向性が高い園ではどのような園の特徴があるかを明らかにすることを目的に研究を行った。その結果、職員間の同僚性を促進し、保育を振り返るための時間の確保することが、保育者子どもへの応答性を高め、子ども自律型の保育を軸とした協同的な学びを支え、保育の豊かさへとつながっていることが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

わが国の歴史的・文化的・社会的における保育の質は自明ではない。本研究では、子どもの主体性が尊重され、協同性を高めることが、保育の豊かさにつながっていることを明らかにしたことの意義は大きいと考える。また、それは、園における語り合う風土の醸成など園長などのリーダー層のマネジメントの役割の重要性を示すこともできたと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to determine how child-centered cooperative learning in early childhood is related to the improvement of the quality of childcare, and to identify the characteristics of preschools with a high level of such an orientation. The results confirmed that promoting collegiality among staff and allowing time for reflection on childcare enhances the responsiveness of caregivers to children, supports cooperative learning based on child-autonomous care, and leads to enriched childcare.

研究分野：幼児教育学・保育学

キーワード：幼児教育 保育の質 協同的な学び 園長の園運営

1. 研究開始当初の背景

わが国では、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育保育要領の改訂などがあり、保育の質向上、あるいは子ども主体の保育が求められている。特に、小学校への滑らかな接続が求められるなど、主体的であると同時に「協同的な学び」であることが重要な視点である。

しかしながら、わが国の歴史的・文化的・世界的背景における保育の質は自明ではないほか、子どもの主体性を尊重し、遊びを通じた協同的な保育実践は必ずしも一般的に行われているとは言えない実態もある。乳幼児期の保育の質の重要性などを示す研究なども報告されるようになり、その重要性は認識されるようになってきたが、わが国において実践的な視座から保育の質とは何かを明らかにされていない実態がある。また、主体性や協同性の重要性が指摘されているが、それが保育の質とどうつながるかを明らかにしているとはいえない実態がある。

2. 研究の目的

本研究は、「子ども主体の協同的な学び」による保育（幼児教育）の実態とその意義（保育の質との相関）を明らかにすることを目的とする。ここで言う「協同的な学び」とは、「プロジェクトアプローチ」と呼ばれるものや、「協同する経験」、あるいは「協同的活動」などと呼ばれるものを総合的に捉えたものである。

具体的には、子どもの主体的で、協同的で、継続的な、テーマ性を持った活動を指す。その中でも、子どもの主体性を尊重するとともに協同性を重視する保育実践と保育の質との相関を明らかにしたい。特に、そのような志向性の高い園にはどのような保育の特徴があり、保育の質を高めるための園運営の特徴があるかを明らかにしたい。

3. 研究の方法

本研究では、3つの側面から研究を行う。

(1) 文献および先行研究の整理

第一には、協同的な学びによる保育に関する文献および先行研究の整理を行うことで、研究の意義と課題を見出す。

(2) アンケート調査

第二には、保育所・幼稚園・認定こども園の園長を対象としたアンケート調査を行い、保育の質と主体的で協同的な保育の関連性の分析を行う。

(3) インタビュー調査

第三には、第二のアンケート調査結果に基づき、主体的で協同的な保育の志向性が高い園の園長を対象にインタビュー調査を行い、質的分析を通して、保育の質を高めている園の運営の特徴を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 先行研究の整理と本研究の位置づけ

「協同的な学び」（あるいは「協働的な学び」）の概念は、古くはジョン・デューイにさかのぼる。その流れは、プロジェクト活動等として世界中に広がっている。小学校以上の教育のみならず、幼児教育においても広がっている。日本においても、例えば、倉橋惣三は当時のコンダクトカリキュラム概念を踏まえ、「誘導保育論」として、子どものさながらの生活のとしての「遊び」の延長線上に「誘導」（つまり、プロジェクト的、あるいは「協同的な学び」的な活動）を位置づけようとしてきた。しかしながら、これらの用いられ方は一様ではない。ここでは十分に記すことはできないが、「協同的な学び」は重要なキーワードでありながら、多様な文脈で持ちられてきた概念である。

本研究では、保育現場において「協同性」を育むとされる活動としては「協同的活動」「プロジェクト活動」「テーマ活動」などが挙げられるが、これらは概念規定も一定ではなく、具体的にどのような活動を指すのか、十分な整理がなされていないのが現状である。

そこで、本研究では幼稚園要領・保育所保育指針等において、子どもたちが主体的に活動することの重要性が謳われているという点を踏まえて、主に5歳児クラスの子どもたちが自律的に活動するような保育を「協同的な学び」の中核に据えて、保育者が主導となるような活動と対比させながら、背景要因について検討することを第一の目的とする。

この「協同的な学び」とは、「保育の質」という視点に立てば、「協同性」という「成果の質」を支える「プロセスの質」の一部であると言えるが、「プロセスの質」の視点では、子どもと保育者との関係性を含むあたかさも、やりとりの質などが含まれる。そのため、本研究では、保育者が子どもに対してどのような関わり方を行っているのかについても着目し、

「協同的な学び」との関係性について検証する。

(2) アンケート調査の概要

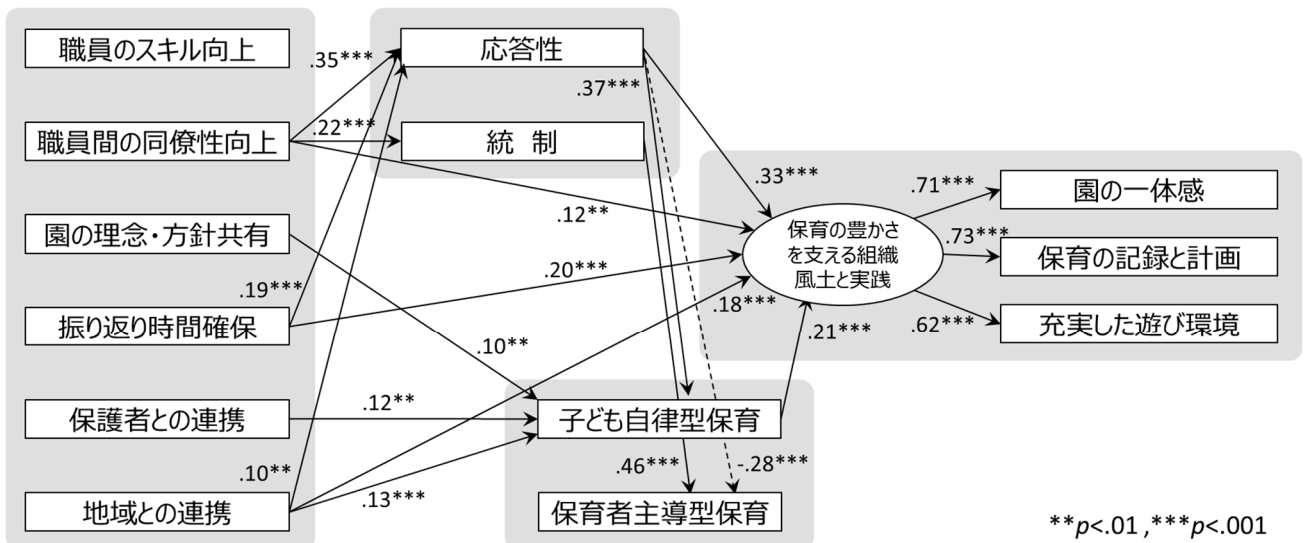
本研究において、先行研究の整理を踏まえ、アンケート調査を中心に研究を進めてきた。幼児期における子ども主体の協同的な学びの保育が保育の質向上といかに関連性を持ち、また、そのような志向性が高い園ではどのような園の特徴があるかを明らかにすることを目的に研究を行った。

首都圏の幼稚園、認可保育所、認定こども園の園長(所長)を対象とした質問紙調査を実施した。調査への協力は任意であることを説明し、保育関連団体の協力を得た上で、園長(所長)対象の研修会会場等で、もしくは園ごとに郵送によって調査票の配布・回収を行った。計 2641 部 配布し、1090 部の回答を得た(回収率 41.3%)。このうち、完答データ 820 部を分析に用いた。園種による内訳は、幼稚園 187 (22.8%)、認可保育所 574 (70.0%)、認定こども園 59 (7.2%) である。

(3) アンケート調査結果

本研究では、園長による園の運営が、保育者の子どもへの関わり、5 歳児クラスにおける保育、そして、保育の豊かさにどのように関与するかを検証するモデルについて、共分散構造分析を行った。その結果が Figure 1 である。職員間の同僚性を促進し、保育を振り返るための時間の確保することが、保育者の子どもへの応答性を高め、子ども自律型の保育を軸とした協同的な学びを支え、保育の豊かさへとつながっていることが確認された。

つまり、子どもの主体性を尊重し、協同的な学びの実践は保育の豊かさ(質)と関連性があり、園長による園の運営、保育者の子どもへの関わり(応答性に加え、ゆるやかな統制)との関連性があることを明らかにした。



注1) 数値は、標準化推定値を示す。実線は正のパス、破線は負のパスを示す。
 注2) 「園の運営」の観測変数間における共分散、誤差変数、標準化推定値が0.1未満のパスは省略した。

Figure1 5 歳児保育における保育の豊かさと子ども自律型保育、園長の運営との関連性

(4) 質的調査による分析結果

本研究では、子ども主体の協同的な遊びや活動を重視する保育への志向性の高さが、保育の質向上に結び付くとの仮説のもとに研究を行ってきた。そうした志向性のある園では、どのような取り組みを行っているかを分析することにより、保育の質を高めるための構成要素を明らかにすることができるのではないかと考えた。園長を対象にした質問紙調査を実施し、「職員間の同僚性の向上や保育を振り返るための時間の確保といった園長の取り組みが、保育者の受容的な関わりや子ども自律型保育へとつながり、それらが保育の豊かさを高める」ことを導き出した。つまり、園長の「園の運営」のあり方が子ども主体の協同的な遊びや活動の志向性を高める要因となると言える。

質問紙調査では「園の運営」の要因として、「職員間の同僚性の向上」「職員のスキル向上」「園の理念・方針共有」「振り返り時間の確保」「地域との連携」「保護者との連携」の6つがあることがわかった。そのため、この6つの園運営の要因について、それぞれの園ではどのような取り組みを行っているかを分析することにより、子ども主体の協同的な質の高い保育を行う構成要素を明らかにできるのではないかと考え、インタビュー調査を行った。

質問紙調査に回答いただいた園の中で、子ども主体の協同的な活動への志向性が高かつ

た園の園長を対象にインタビュー調査を行った。その志向性が高かった園には「子ども自律重視」「かかわり重視」の2つのタイプがあり、その2つのタイプを考慮し6園を選定し、インタビュー調査を行った。質問項目は、質問紙調査から導き出された「園の運営」に関する6つの要因（「職員間の同僚性の向上」「職員のスキル向上」「園の理念・方針共有」（園の変化のプロセス・長のリーダーシップ）「振り返り時間の確保」「地域との連携」「保護者との連携」）について、園長を対象に半構造化面接を行った。その結果については、現在、論文投稿に向けて作業をすすめている。

その結果概要として、子どもの自律性（主体性）および協同性を高める保育を進めている園の特徴としては、おおよそ以下の概念がうかびあがっている。

○リーダー層のマネジメント（理念共有、働き方・ライフデザイン、職員の主体性重視、若手職員の主体性、葛藤を乗り越えるチーム作り、リーダー層の役割、ICT活用）

○園内の語り合う風土（時間、記録、計画、子ども理解、ドキュメンテーション、写真活用、ウェブ、受容的な関係性づくり）

○保育実践の見直し（遊び中心の保育、ていねいな保育、行事の見直し、既存目標の見直し、環境の見直し、子どもの生活を面白がる風土形成）

○保育を開く・地域資源の活用（公開保育の充実、他園との連携、小中学校との連携、外部研修の活用、保育への地域資源の活用）

○家庭との積極的な連携（発信、信頼関係、保育参加、保育理解、多様化し変化する保護者へのかかわり）

以上が、子どもの自律性（主体性）を尊重し、協同的な活動を重視し、保育の質を高めている園の園長が園運営において重視している内容と考えられる。特に重要なのは、保育において、「子ども、職員、家庭、地域との対話」が基盤となり、「職員間の語り合う風土」を重視し、「保育を外に開き」、「これまでの保育の在り方を見直し」再構築しようとするマネジメントの意識が共通に見いだされた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 高嶋景子・岩田恵子・松山洋平・三谷大紀・大豆生田啓友	4. 巻 第59巻3号
2. 論文標題 保育の質向上と保育者の成長を支える往還型研修 - 実践と研修の往還がもたらす新たな意味と価値の創造過程 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 保育学研究	6. 最初と最後の頁 23-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 荒牧美佐子・大豆生田啓友・松永静子	4. 巻 60
2. 論文標題 保育における「協同的な学び」の背景要因及び保育の豊かさとの関連	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 保育学研究	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩田恵子・大豆生田啓友・鈴木美枝子・田澤里喜・田甫綾野	4. 巻 19号
2. 論文標題 「ドキュメンテーション型実習日誌」の試みと課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『論叢』玉川大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 125-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大豆生田啓友・岩田恵子	4. 巻 7号
2. 論文標題 わが国における保育ドキュメンテーションの可能性に関する一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 子ども学	6. 最初と最後の頁 125 140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大豆生田啓友	4. 巻 160号
2. 論文標題 津守真と保育 - 体験と思索から生まれた保育の真	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 発達	6. 最初と最後の頁 26 31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 荒牧美佐子・大豆生田啓友・松永静子・無藤隆
2. 発表標題 保育における「協同的な学び」の背景要因及び保育の豊かさとの関連
3. 学会等名 第31回日本発達心理学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大豆生田啓友・高嶋景子・三谷大紀・横尾暁子
2. 発表標題 往還型研修の取り組みに関する考察 (3)
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 汐見 稔幸、大豆生田 啓友、秋田 喜代美	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 242
3. 書名 保育者論	

1. 著者名 大豆生田 啓友、大豆生田 千夏	4. 発行年 2021年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 120
3. 書名 非認知能力を育てる「しつけない」しつけのレシピ 0歳～5歳児の生活習慣が身につく	

1. 著者名 大豆生田啓友、大豆生田啓友、高嶋景子、三谷大紀	4. 発行年 2020年
2. 出版社 学研教育みらい	5. 総ページ数 128
3. 書名 「語り合い」で保育が変わる	

1. 著者名 大豆生田 啓友、おおえだ けいこ	4. 発行年 2020年
2. 出版社 小学館	5. 総ページ数 144
3. 書名 日本版保育ドキュメンテーションのすすめ	

1. 著者名 大豆生田啓友	4. 発行年 2021年
2. 出版社 チャイルド本社	5. 総ページ数 127
3. 書名 園行事を「子ども主体」に変える 11か園のリアルな実践記録	

1. 著者名 大豆生田啓友・三谷大紀	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 840ページ
3. 書名 最新保育資料集 - 保育・幼児教育に関する法制と基本データ	

1. 著者名 大豆生田啓友・大豆生田千夏	4. 発行年 2019年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 128
3. 書名 非認知能力を育てるあそびのレシピ 0～5歳児のあと伸びする力を高める	

1. 著者名 大豆生田啓友・おおえだけいこ	4. 発行年 2019年
2. 出版社 小学館	5. 総ページ数 160
3. 書名 日本が誇る ていねいな保育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	無藤 隆 (MUTO Takashi) (40111562)	白梅学園大学・子ども学研究科・教授(移行) (32808)	
研究分担者	松永 静子 (MATSUNAGA Shizuko) (70551563)	秋草学園短期大学・その他部局等・教授 (42406)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	荒牧 美佐子 (ARAMAKI Misako) (80509703)	目白大学・人間学部・准教授 (32414)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関